

# 卒業生からのメッセージ

## 北の大地

NHK  
中島 史博さん

北大法学部の魅力は何かと問われれば、人だけだけでなく、「北の大地」という言葉に象徴されるように、雄大な自然を含めた、総合力ではないでしょ



うか。  
法学部には、多くの個性的な先生方はもちろん、全国各地から集まった同期生や先輩方、さらに世界各地の留学生がいます。加えて、北大にはあらゆる学部があり、様々な知識や特技、考えを持った人たちと知り合う機会に恵まれています。  
それは、まさに社会の縮図ともいえます。  
私自身、大学卒業後も、あらゆる業界に友人がいることは大きな財産になっています。  
こうした財産を培うには、北海道の雄大な自然が欠かせません。私自身、スキー部に在籍していて、1年のうち100日以上、山に通っていました。冬は、授業が終わると直ちに仲間と車でスキー場に向かい、練習する日々でした。また、雪が解け、新緑が芽吹く春から夏にかけては、ニセコや海でキャンプをして、ジンギスカンを食べ、酒を呑むということもよくやりました。  
しかし、自然は、楽しい体験のツールとなるだけではありません。時には、人間の力ではどうにもで

きない大きな力を見せつけます。厳しく見える時もあるれば、感動を与えてくれる時もあります。  
本州とは異なる自然での体験を通じて、多くの友人との関係が生まれ、今でも貴重な財産となっています。  
そして、自然は、時に「癒し」を与えてくれます。失敗したり孤独を感じたりする時もあります。でも、そういう時、自然の中に身を置いてみると、「北の大地」がやさしく包み込んで、力を与えてくれるのです。

- 卒業年次  
1995年3月 法学部卒業  
1997年 大学院法学研究科修士課程修了
- 現在の職業  
NHK記者 報道局政治部
- 在学時に興味を持って学習した科目  
アメリカ政治  
アジアとナショナリズム
- 学生時代、勉強以外で取り組んだこと  
スキー
- 北大法学部を一言で表現すると  
青春の1ページ

## 君は、ジェフリー・アーチャーを読んだことがあるか

北海道庁  
高見 芳彦さん

北海道の地方都市の高校生だった頃、同級生のみんなが大学は東京へ行きたいと言っているのにちょっと反発がありました。  
北海道には、あのクラーク博士の北大があるじゃないか、そう思ったのです。  
北大法学部は、当時から新進気鋭の教員を多数擁した学問の一大拠点であり、憧れを抱いた学生が全国から集まってきました。そして、広大なキャンパスの中はバブル全盛の時代でもゆったりとした時間が流れていた素晴らしい環境をもった大学です。  
なにより、北大法学部は学生一人当たりの教員数では当時から全国でも屈指でした。それは数の問題だけでなく、教員と学生との関係が濃密で知的刺激を直に受けることができるということです。  
専攻した憲法ゼミでは公私にわたり熱心にご指導いただきましたが、視野を広げる意味で顔を出した政治学系の演習でも課題図書レポート

指導で丁寧に対応いただいたと思います。当時、一端の読書家を気取っていましたが、「君の読書は偏っている」と教室で指導を受けた記憶がまだに強烈に残っています。その時、助教授に言われたのがタイトルの一言です。紹介された1冊でストーリーテラーの妙手の虜になり、以来、40歳を超えた今でもアーチャーの新作は必ず読んでいます。  
卒業後は、「グローバルに考え、ローカルに行動する」という思いを持って道職員になりましたが、考え方のベースは北大法学部で学んだものです。  
この春、母校の卒業生を含む新しい職員を道庁に迎え入れました。新人研修で彼らに講義をしながら、様々な本を紹介しています。そして、「こんな本も読まずに道職員といえるのか、地域のことを知らずに、我々道職員は一体何ができるのか」、そう若い職員を「挑発」しています。あの時の教官のような思いを込めて。



- 卒業年次  
1990年3月 法学部卒業
- 現在の職業  
北海道総務部 人事局 人事課
- 在学時に興味を持って学習した科目  
憲法。いわゆる「四人本」の中村睦男、高見勝利両教授にご指導いただきました。
- 学生時代、勉強以外で取り組んだこと  
同級生とCREATIVE Group TAKを結成し、各種イベントを手がける。また、法学部卒業プロジェクト代表として卒業アルバムや卒業パーティを企画実施。
- 北大法学部を一言で表現すると  
澄み切った青空

## 北海道で可能性の探索

米国マサチューセッツ州弁護士  
ヒューイト 佐野 万智子さん



中村研一教授の国際政治学に感銘を受け北大文学部西洋史学科から法

学にも多いので政府機関や地元銀行・企業とも仕事をします。プロジェクトベースで様々な組織の指導者層と働いて刺激の多い職場です。  
今在る自分の基礎は北大法学部で培われたと思っています。まず非常に優秀でしかも親切な教授陣。講義、ゼミは言うまでもなく、若者の迷いから世界状況・思想史まで授業外の懇談に先生方が時間を割いて下さった価値は計り知れません。次に北海道の空間が可能にしてくれた広い視野。元来考古学者になりたくて東京の某私大に入学予定でしたが、静岡から東京に出て人生の貴重な形成期をこんな混雑して狭い所で送っては思考も近視眼的になると思い、北大に入学しました。今でもこの選択は正しかったと思って

学部で学士入学し、交換留学制度でマサチューセッツ州立大に1年行かせて戴いたので北大には計7年在籍しました。  
渡米後、大学講師と企業勤務を経てボストンのロースクールで法学博士を修得し、現在はマサチューセッツ州司法試験を経て弁護士及びプロボノ照会担当として法律相談事務所働いています。弁護士協会が設立した事務所です。非営利団体と弁護士事務所を照会するのですが、州や自治体の経済発展・住宅政策に関わるプロジェ

- 卒業年次  
1987年3月 法学部卒業
- 現在の職業  
米国マサチューセッツ州弁護士  
Legal Referral Director, The Lawyers Clearinghouse, Boston, Mass., U.S.A.
- 在学時に興味を持って学習した科目  
国際政治、国際法、政治学、憲法、アメリカ研究、外国語(英、独、西、ギリシャ語)
- 学生時代、勉強以外で取り組んだこと  
留学生援助サークル
- 北大法学部を一言で表現すると  
広い視野を育む大地と教授陣

います。最後に国立の中でも特に多く北大に送られた留学生との交流。経済開放直後の中国人留学生を始め、世界各国の学生と親しく交流する機会は大変貴重でした。グローバル化が様々な角度から進む今、自在に視点を変えられる能力は世界の若者の間で当たり前のものとなりつつあります。北海道で自分の可能性を探求してより大きく伸びて下さい。  
The Future belongs to you.

## 鈍牛が如く～北大法学部・司法試験を目指したあの頃～

弁護士  
高橋 智さん

私は、札幌南高校を卒業して、昭和52年に北大に進学、法学部を昭和59年卒業し、その後4年を費やして、司法試験に合格して、弁護士になり、今札幌で弁護士をしている。  
私が法学部に在籍していた当時は、景気が良く、法学部を卒業したら、大企業に就職したり公務員になるというのが当たり前の時代だった。そんな中、受験生2万人に対して500名しか合格しない(合格率約2%)、しかも、合格者の平均年齢は30前後という試験に(ちなみに、現在は2000名合格で、合格率30%程度)、あえてチャレンジしようとする学生達は、周囲から見るとある意味「愚か者」であり、「異端児」だった。大学側も無関心であった。大学の価値は教授の研究内容で決まるという考えだったので。そんな時代にあって、異端児達は、留年時代そして卒業してからも法学部の自習室で勉強していたが、自然と「給湯室」スペースに集うようになっていった。ここには最盛期20名前後の司法試験受験生が集っていた。そして、いつか彼らは「給湯室」と呼ばれるようになっていた。周囲の一般現役学生達から見れば、彼らが使うべき自習室や給

湯室を占拠する疎ましい存在だったに違いない。  
しかし、北大からの司法試験合格者のほぼ全員が給湯族出身者であったのも紛れもない事実であった。北大からの合格者は、他の国立大学からみて非常に少なく、毎年3名から6名程度だったが、もし、給湯族がいなかったら合格者ゼロという年が何年もあったはずだ。曲がりなりにも北大法学部に入学しようとする高校生に、当時の法学部が司法試験挑戦の灯りを点し続けて来られたのは、給湯族の存在があったからであった。  
給湯族は、ただ、お茶を飲み、食事をしていたのではない。択一試験、論文試験に備えて、皆で、様々な議論やゼミをしていた。仲間から合格者ができると強烈にうらやましいという気持ちが起きると同時に、あいつでも受かったのであるから次は自分の番だろうと確信することができた。  
みんな金がなく、いつも決まった服を着て給湯室に出入りしていたが、時間だけは自由に使えた、そして、司法試験合格という目標に向けてひたすら努力すれば良かった。ある意味贅沢な時代であった。そして、そこには、無謀と思われながら、一途に、鈍



牛がごとく最終合格を泥臭く目指す姿があった。  
ところが、私が合格を果たした年、現役学生から、卒業生の自習室利用や給湯室の利用に抗議する声が上がった。疎まれていた給湯族は、法学部から排除された。当然ながら、その翌年から北大の司法試験合格者は大幅に激減し、長い低迷期に入る。  
今、時代は流れ、司法試験の門戸も大きく開放された。司法試験を目指すことは異端なことでも無謀なことでもなくなった。むしろ、北海道大学は地方の大学にあって司法試験合格率トップテンに入るような、司法試験に挑戦する学生をサポートしてくれる大学に変身した。  
東京の諸大学のようなスマートさには欠けるが、鈍牛がごとく、一歩ずつ、あちこちにぶつかりながらじっくりと真理に近づき、実力を付けていくのが北海道大学のスタイルだ。  
北海道大学出身の弁護士、裁判官、検察官は、どの分野でも、泥臭いが深く輝いていると思う。